

哲學研究

第二百六十六號

第二十三卷
第五册

行爲と論理 (承前)

五

島 芳 夫

我々は先づ行動一般を、そして又それと關係して特に道德的行爲を心理的事實として、その構造と特質に關し説明と分析とを試みたい。こゝに我々は行爲 conduct と云つて行動 behaviour と對照させる場合、後者は前者を包括するより廣い類であり、前者は後者の自覺的發展形態と解する。さてマクドガルによると、行動を機械的運動から區別する一般の特色は次の四點に分れる。一、生物の行動は生命のない物質の塊が外力によつて一定の方向に動かされてゆくのととは全然異つた仕方、従つて機械的運動として説明され得ない特色をもつてゐる。換言せば、生物の行動は或る目的に向つて持續的に努力すると云ふ特色をもつてゐる。蓋し、生物の行動は妨害に會ふ場合には、機械的運動の如く停止したり、或は弱められたりせず、却てかゝる妨害はより強い努力を呼び起し、且つこの努力はその目的が達せられる迄は持續するからである。そして生物行動の目的とは、一般に生物と環境的對象との關係に變化を加へる點に存

するので、又この變化は根本的には生物の個體乃至種、筆者が更に附加するならば、生物の特殊社會の生の要求に應ずるのである。二、生物の行動は單に或る一定の方向に持續的に進むのみでなく、或る妨害に會するならば努力は依然持續するが、運動の方向や種類は妨害が除かれるまでは様々に變化する。それ故、行動は或る目的に向つての持續的な試みであり、努力であると同時に、必要の場合には目的到達の爲に使用される手段の變化を伴ふものである。

三、行動には有機體の全體が關係する。總ての行動は反射運動のやうに部分的な反應でなく、有機體の全體の精力が目的到達の仕事に向つて集中される。行動に専ら關係する器官の爲に他の總ての器官は協力し、或はそれに從屬せしめられ、或はそれと同格に利用される。四、以前と同じ情勢が來る場合に、生物はたとひ類似した仕方で行動するとしても、機械的運動の場合の如く全然同じ運動が繰返へされるのでなく、一般に行動の能率の増進や手段を目的によりよく適應させると云ふ進歩の兆候が見られる。^①

① McDougall, An Introduction to Social Psychology, p. 354-355.

さて、右に述べた行動の四つの特性は結局行動の目的論的性格に基くのであり、この性格の客觀的表現と見ることが出来る。既に一に於て説明したやうに、マクドガルは行動は意欲を中心動力とし、知と情をその兩翼とする複雑な性質を帯びてゐることを力説するのであるが、目的の追求と云ふ本來意欲の働きは知と情の作用を通して、右の行動の特色を現象させるものと解釋され得る。特に、二と四の特性は明かに行動認識の働きを示してゐるもので、就中最後の行動の改善可能性はトールマンの解釋によれば、認識による行動の從順性、經驗の教訓に從順な行動の知的變形性 *docility* を示すものとして重要である。寧ろトールマンの眞意に於ては、行動の從順性は行動の定義の最後の仕上

けをなすものとして最も重要な意味が與へられてゐるのであつて、行動が目的々であると云ふことは單に行動の持続性や試みと失敗の多様、變化性によつて定義され得るのでなく、これらの行動の特色が行動の目的性を證し得るのはそれらがより有效な行動の仕方を選択し得る從順性を含蓄してゐるからである。尙又トールマンは單純な刺激—反應の關係による行動の所謂分子的定義に對して、有機體全體の場に於ての行動の質量的定義——マクドガルの三の特性——も亦、順應が成功する爲には有機體の各部分の相互連鎖が必要であると云ふ所から從順性の結果と解釋する。^①

① Tolman, Purposive Behavior in Animals and Men, pp. 13-19. トールマンの行動の定義には然し二つの疑問を呈出し得ると思ふ。第一、彼が行動の目的性の客觀的表現として從順性乃至馴致性、換言せば行動認識の存在を過重視せる點である。斯くては目的行動の本來意慾的な性格の定義が不可能となる恐れがある。行動の意慾的特性はアッハの試みたやうに、體験的力學的の兩見地から説明されねばならない。行動の持続性は明かにアッハの意志の決定と云ふ力學的特性を示すものと考へられる。即ち行動の持続性は從順性とは無關係に、それ自身行動意慾の力學的表現と考へられる (Ach, Über den Willensakt u. das Temperament, S. 21)。第二、行動の質量的定義は行動を單に個々の刺激と反應の關係に分解する分子的定義に對して、人間全體の行動を研究對象とするものとして大きな意味をもつ。それは意味的に統一された行動の全體を研究する態度であり、やがて心理學と文化科學との連繋を促す實りある思想を宿してゐる。然し、この全體性的性格がトールマンの解するやうに、行動の馴致性の結果と解し得るかは問題であらう。それは分肢的全體性としての人間存在の根本規定を豫想して始めて理解され得ると思ふ。トールマンの行動認識の過重視がこゝにも現はれてゐることを注意しておく必要があらう。

だが行動の根本性格をその有目的性と考へる場合に、それが一體何を意味するかを豫め明かにしておかねばならぬ。行動は單に外から強ひられた機械的運動でなく、内在的目的に規定されて生物の欲求から生ずる自發的運動であ

る。然し、目的の内在と目的の意識とは同一ではないが、マクドガルはこれをどう解するか。彼によると、目的行動は本質的に何等かの程度で目的の意識を伴はねばならぬ。尤も、我々は通例目的活動と云ふ時、目的を熟慮して選擇し、豫見された目的を自覺的に追求する高次の意志行爲と考へ易いが、然し、斯く狹義に目的活動を解する時は低い段階の動物行動は全く目的行動の範圍に屬さないことになる。然し、目的意識はこのやうな反省的目的觀念のみに限らず、極めて漠然たる目的の知覺、目的の感情が存在するのであり、下等動物の目的行動とはこの種のものである。要するに、如何に下等の動物行動でも、或るものに就ての漠然たる意識とこの或るものに於ける或る變化の漠然たる豫想を含むのである。^①

① McDougall, An Introduction to Social Psychology, p. 360.

右のマクドガルの目的行動の説明に對しては、我々は次の如き注意を加へねばならない。一、トールマンの批評の如く、彼は目的行動の根柢に或る漠然たる目的知覺、感情を想定することにより、換言せば目的を以て行動の中に現象する仕方とは異なる何か特殊の心理的な或るものと解することにより、結局内省心理學の痕跡を脱してゐない。然るに、行動主義の立場にとつては、目的は試みと失敗及び馴致性の事實によつて純粹に客觀的に定義される變數と云ふ意味をもたねばならぬ。若し、小猫が垂直に置かれたぼたんを見て色々な試みをやり始め、そしてこれらの努力がぼたんを水平にひつくり返す仕方が發見されるまで持續し、且つ手當り次第の努力が有效な活動を行はうとする一定の傾向によつて置き代へられた時、我々は小猫はぼたんをひつくり返すことを目的としてゐると云ふことが出來よう。^①

二、我々は行動主義の沒意識的純客觀的立場を支持するものではない。意識なき心理學とはそれ自身矛盾した言葉で

ある。低い段階の行動に於ても、目的の漠然たる知覺、感情が存在し得ることはマクドガルの説く通りであり、又たとひ目的に就ての意識が存在しなくても、緊張、不安等の情意的體驗による目的への方向、志向が存在し得るであらう。然し、行動の本質が目的行動に存し、而して目的行動の本質はその目的意識に存するとせば、このやうな意味の目的行動は行動全體の本質を定義し得ないであらう。蓋し、本能的行動や習慣的行動に於ては目的意識が存在するとは考へられぬからである。たとひ、從屬的目的は意識されるとしても、終局的目的は無意識的に作用してゐると考へられる。一般に單にこの種の行動のみならず、自覺的合理的行爲に對しても無意識的目的意欲の存在は否認出来ない。それは情意的無意識的目的が感情の論理を仲立ちにして行爲に影響する場合に外ならない。三、明白な目的意識が存在する場合でも、この意識が常に目的の忠實な反映とはならず、意識は屢々目的に就て虚偽に陥る。そして、この意識の虚偽の存在は單に目的行動の主觀的存在と客觀的存在との喰違ひを語るのみならず、又偽善的行爲を生ぜしめる危険をもつてゐる。主婦が臺所の器具を破損した女中を叱る場合に、この叱責は破損に對する不快、立腹からでなくて、女中の輕率に對する戒めを目的とすると信じたがる心理はこの自己欺瞞の一例である。この種の道德的虚偽も矢張り目的表象に對する感情の論理の影響と見做され得よう。然し、この種の目的行動の存在はその目的表象の點では主觀的虚偽的であつても、客觀的觀察の點から依然として目的行動なる事實の眞理を證してゐるのである。

① Tolman, *op. cit.*, pp. 14-16.

六

我々がマクドガルの行動論に於て見出す一つの缺點は右の批判からも推察されるやうに、行動の現象學的內省的觀

察と力學的客觀的觀察の兩見地が區別されずに混同されてゐる點である。彼自身は内省的方法の不充分なる點を指摘し、客觀的方法の重要さを力説し、又本能、感情の分析に於てこの方法を廣く應用した點にその大きな功績があると思はれるが、然し、行動論に豫想される右の兩見地がその區別と關聯とに於て把握されてをらず、行動の力學と體驗とが各々その特質に於て究明されてゐないことは疑はれぬ點であらう。目的の認識體驗は行動の認識體驗の重要な特性であるが、然し不可欠なものではなく、況や又目的行動の不可欠の特性では尙更ない。

行動乃至行爲の心理學的研究に於て、現象學的觀察と力學的觀察との混同すべからざることにはレヴィン、アッハに於て説かれてゐる。從來心理學に於ては、現象學的觀察が主位を占め、力學的觀察は輕視され、或は前者と混同されてゐた。斯くて、現象學的に純粹な類型の構成が重んぜられ、而して又、この純粹な類型が力學的にも優越した役割りをもつと考へられた。然し、現象學的に互に等しい形成物乃至過程は必ずしも因果的力學的に、即ちそれらの原因結果上から云つて互に等しいとは云はれない。寧ろその反對の場合が可能である。例へば、古い植物學に於ては、植物はその葉や花の形態に従つて、即ち現象型的類似に従つて分類された。然し、同じ植物が平地に植ゑられた場合と、高地に植ゑられた場合とによつて異つた形をもち得るであらう。一定の現象型は一定の條件複合物、即ち一定の情勢の説明によつて確定される。^①單に生物學ばかりでなく、歴史科學や社會科學に於ても純粹類型の抽象によつてでなく、一定の發展段階、一定の環境條件の力學的背景の下でのみ具體的な現象形態の確立が可能である。心理學に於ても、心理的複合物や過程が力學的觀察の對象として取扱はれる時には、それらは最早その現象的特性によつて充分に規定されない性質や法則を現はして來るのである。例へば、體驗上強い企圖作用は體驗上弱い企圖、乃至現象學的に

は企圖作用と云ふべきよりは寧ろ單なる思想とも云ふべき程の弱い體驗に比較してさへ、因果的力學的には遙かにその力が弱いことがあり得る。又感情が外面的に烈しい活動を呼び起し、内面的にも強い昂奮を伴ひながら、而も力學的に云つて非常に表面的で精力の貧しい感情であり得る。情意に對するこの兩見地の差別はたとひ方法論的自覺を伴はぬにせよ、今迄も存在せぬことはないのであつて、例へば、ヒュームの烈しい情慾と穩かな情慾との差別、カントの激情と情慾との差別の如きは既にこの情意の二元的性質に觸れてゐる。^①

① Lewin, *Vorsatz, Wille u. Bedürfnis*, S. 18-19.

② *Ibid.*, S. 19-20.

③ ヒュームは體驗上烈しい情慾は必ずしもその力強からず、穩かな情慾必ずしも弱くないことを云ひ、此種の穩かな情慾には種々なる本能(慈愛、怨恨、生命愛、子供に對する親切)乃至善惡に對する愛憎がある。情慾が支配的となり、固定的な行為の原理になつた時は特別の感情もなくて靜かに作用するから屢々理性の作用と混同される恐れがある(Hume, *A Treatise of Human Nature*, II, p. 129-130, Everyman's Library)。カントは *Affekt* と *Leidenschaft* の區別を極めて巧妙な比喩で説明してゐる。前者は「堤坊を突き破る水の如く」作用するが、後者は「河床を愈々深く掘り込む河の如く」作用する。前者は正直で開放的だが、後者は狡猾で陰險であり、それだけ實踐理性にとつて恐るべき疵である(Kant, *Anthropologie*, S. 181-185)。

固より、行動體驗と行動力とは本質上一致しないと云ふのでなく、精力的で深い情意は又穩かであるが、然し深く力強く體驗され得るのであるが、然し、兩者の不一致はあり得るのであり、且つその場合が多いのである。否アッハによれば、意志過程から生ずる力學的影響、彼の所謂決定 Determination は通例無意識的に作用するのである。若し

私が明日一定の時刻に或ることを行はうと企圖する時、その時刻が来たならば、以前の私の意圖を思ひ出す要なく直ちに實行する。^①この私をして實行させる力が意志の力學的影響即ち決定であるが、それはこの場合無意識的に作用すると云ふのである。斯くてアッハに於ても、意志の體驗面と力學面とは相異なる面として區別されてゐる。一般に活動すること、體驗すること、はその存在の仕方から云つて異なるは當然であるが、然しこのことは廣く人間存在、乃至その表現たる人間行動の全體の場に於て互に全く分離し、相互作用を有しないと云ふ意味であつてはならない。無意識的決定が聯合法則よりもつと根本的に我々の表象、感情等の體驗生活に大なる影響を及ぼすやうに、^②逆に知情その他の意識體驗が決定に與へる力も無視出來ない。事實知情意の力學的觀察と現象學的觀察とはその觀察の意味が異り、その間に喰違ひが存しても、然し依然として兩者間の相互作用は豫想されてゐるのであり、これ體驗を無視した行動主義、客觀主義の成立し得ない所以である。アッハが決定を生ぜしめる原因として「自分が意志する」と云ふ決斷の體驗を擧げ、又快不快の感情と決定の強化との關係を論じてゐる點は明かにこの事實を示してゐるのである。

① Ach, Über den Willen, S. 4.

② 意志の決定が表象乃至思想生活に對して大きな力學的影響をもつことは著明な事實である。一定の原理を把持すると云ふことは單に記憶の問題でなく、意志の力の問題である。それがカントの云ふ道德的性格の意味である。單純な表象生活に於ても、或る一つの表象を機會に他の表象を體驗すると云ふことは單に觀念聯合の結果でなく、決定が著明に作用する。例へば、Vater と呼び掛けて Mutter を表象する時はこの結合は觀念聯合によつて説明されるであらう。然し、若し或る言葉の呼び掛けに従つて韻を作る課題が興へられ、然る後 Vater と云つた時には以前の如く Mutter が表象されないで、例へば Vater が表象される。これは決定が韻を作ると云ふ意圖の意味に於て、表象結合を選択的に規制する事實を示してゐる (Ach, ibid.,

斯く現象學的觀察と力學的觀察とはその觀察の差異の反面に却て相互補足の關係を含んでゐる。尙レヴィンの注意してゐるやうに、^①現象學的觀察は直ちに内省と一致せず、又力學的觀察は直ちに客觀的觀察と同一ではない。それらの觀察の差異は總じて内と外の差別と何等の係りが無い。内的體驗も外的行動も固有の力學によつて説明され得るやうに、又等しく現象として體驗觀察と他者觀察とによつて記述され得る。力學的發生的觀察を單に生理的客觀的過程に制限し、内的體驗を單に行動の内在決定要素として解し去らうとする行動主義の誤りはこれにて分明である。力學的見地は本來内と外の差別に無關係故、内的體驗の存在を否定する必要は少しもない筈である。

① Lewin, *Voratz, Wille u. Bedürfnis*, S. 20 Anm.

我々は先づ行動の現象學的觀察から始める。即ち所謂「質量的現象」としての行動の外と内の諸特性の記述を先づ行はねばならない。

トールマンによれば、行動は特殊な目的對象乃至目的情況に達する、或はそれから逃れると至ふ性格を常にもつてゐる。例へば、迷路を走る鼠の行動は食物に達しようとする性質を最も明瞭に現はしてゐる。或は、智慧の箱を明ける小猫の行動は箱の中の監禁から逃れようとする傾向を一目瞭然たらしめてゐる。次に第二の特色は、このやうな何物かに達する、又は何物かから逃れる行動は單に目的對象の性質及びそれへの又はそれよりの固執性によつて特色附けられてゐるのみならず、或る特殊な手段對象との特殊の仕方の交渉を、目的對象に至るべき、或はそれから離れるべき道として含むと云ふ事實である。例へば、迷路を走る鼠の食物に達する行動は特殊な走り方、乃至或る道よりも

他の道を走ると云ふ性質をもつて表現されてゐる。或は、箱の監禁から逃れようとする小猫は箱のしかじかの部分を特殊な仕方で噛み、又は爪で搔くと云ふ特色を帯びた行動を表現する。第三に、このやうな特定の手段對象との交渉を助けにして特定の目的對象へ達する、又はそれから逃れる行動は長い手段活動よりも短い手段活動に對して選擇的により大きな構へを示してゐる。例へば、鼠に目的對象へ達すべき二つのより長い路とより短い路とを示す時は短い路の方が選ばれる。このことは單に鼠ばかりでなく、高等動物や人間に對して寧ろより著明に觀察される現象であるが、この現象は結局手段對象と手段道程に對する選擇性は目的對象の手段目的「方向」と「距離」に相對的なることを示してゐる。要するに、行動の特性記述は一、それに達すべき、又はそれから逃れるべき目的對象、二、手段對象との交渉の特殊な型、三、手段對象との短い(容易な)交渉を含むものとしての道程及び手段目的の選擇と云ふ三つの特性を擧げてゐる。^①

① Tolman, *Purposive Behavior in Animals and Men*, pp. 10-12.

我々は次に行動の外面的記述からその體驗記述に移らねばならぬ。右に行動の第一の外面的特性として擧げられた……への又は……よりのと云ふ目的追求は體驗的には、努力又は反抗として現象すると云ひ得よう。さて努力とはリップスによれば、妨害された傾向である。^①努力はフィヒテ風に云へば、非我によつて制限された自我活動がこの制限を乗り越えようとする所に成り立つ。一定の方向に動き、一定の結果に達しようとする心理的傾向が妨害に會した時始めて努力が體驗される。故に努力には第一に、目的への傾向が存在せねばならぬ。一定の目的と結果に達せんとする運動、傾向が存在せねばならぬ。否もつと根本的に云へば、目的對象の知覺、乃至一定の要求に於て體驗された對

象の存在が先づ必要である。努力は對象要求の主觀化、主觀に於ての反響に他ならない。對象の思惟要求から體驗要求の充足への變化を目ざすもの、或は對象として思考される要求が更に單に思考されるに止まらず、體驗されることの要求を含み、而してこの要求の充足を目ざすものが努力である。^②元來この對象の要求乃至誘惑と云ふ事柄はレヴィン、トールマンに於て明かなやうに、所謂「場の力」として力學的觀察によつて始めてその問題的性質が露はにされるのであるが、然し、このことは決してその體驗現象の否認を意味するのではない。感性的傾向、關心より道德的當爲、至上命令の意識に至るまで、對象要求の體驗の仕方は種々存在するのであり、たとひ明白な要求意識の存せざる無意識的本能に於ても尙漠然たる對象による牽引感は可能であらう。尙又力學的には、對象要求は一定の心理的欲求乃至有機的狀態の存在を豫想するのであり、欲求を満した動物には、例へば食物の存在は最早誘惑的魅力をもたないやうに、反對に對象の要求を感じる場合には、同時にその根柢にそれを成立させる情意的有機的狀態が體驗されるのである。食物を求める場合の餓ゑ、異性を求める場合の性的不滿感の如きこれである。要するに、努力は對象の要求と主觀の要求の二重結果であり、而もその要求の妨害の結果である。而して又努力それ自身が特殊の體驗として存在する。固より、我々は努力を以て欲求そのものと考へるのではない。努力の體驗は欲求の本質を盡してゐない。斯く考へるのは現象學的觀察と力學的觀察との混同である。成程主義主義者が屢々考へるやうに、努力と云ふ人間の様々の夢、迷ひ、期待、緊張を盛つた人間の體驗の中に欲求體驗否人間生活そのもの、本來の姿が現象してゐるが、然し、要求が直ちに現實になる行動、「神光あれと宣へば光ありき」の瞬間の創造的行爲、或は「行ふ所則をこえず」の高度道德的無碍の境地、乃至もつと日常屢々見られる妨害なき滑かな行動——食事をする、着物を着る、平素の職業に

つく等——は何れも努力なき行動であるが、然し、矢張り欲求を基にしてゐることに於ては、最も高い程度の欲求力學の存在が可能である。唯我々の上の主張は飽迄現象學の見地から努力體驗の欲求體驗としての重要性を云ふに止まる。

① Lipps, Vom Fühlen, Wollen u. Denken, S. 29-30.

② Lipps, Psychologische Untersuchungen, I, S. 139-140.

七

さて努力體驗とは如何なるものなるかは種々議論があるであらう。それはリップスの考へるやうに、努力感情と解すべきか、或は寧ろアッハのやうに意識態——その内容が細密に規定出來ぬ意識狀態（疑ひ、混亂、驚きの狀態の如き）——と解するが穩當であらう。①而して、努力の體驗は又身體の運動と緊張の感覺を含んでゐることは明かである。活動乃至努力體驗を純粹な心的體驗或は知的直觀と考へるのは活動概念の神祕化であり、如何なる活動乃至努力體驗にも身體感覺の混入なきものはない。一體如何なる心的體驗も外的生理的徴候を伴はぬものはないが、このことは特に情意體驗に於て著明である。努力體驗と身體運動の感覺との關係に就ては、次のやうな試みが面白い示唆を與へる。丁度ピストルの引金をひく時のやうな姿勢で腕を伸ばし、食指を少し曲げる。この場合指の運動も手の筋肉の收縮も存在しないが、それにも係らず力を使用する時と同じ緊張が感ぜられる。然し、よく注意すると、この努力の感覺は胸部の筋肉を固定し、聲門を閉ぢ、呼吸筋を收縮させてゐることに基くことが發見される。故に、呼吸を元通り進行させると共に努力の意識は消え失せる。或は、右眼の筋肉が麻痺した患者がこの眼を右方に向けようとしても、

この意志作用は固より何等の結果を生じない。だが努力の感覺は矢張り生ずる。この事實からヘルムホルツは、意志そのものゝ努力が意識に現はれねばならぬと云ふ結論を下した。然るにジェームスはこれを反駁して、この場合の努力體驗は實驗中閉ぢられてゐる左眼がそれにも係らず、努力と共に自ら運動してゐると云ふ事實に基くと説明する。斯くて、ジェームスは努力の體驗は求心的であつて遠心的ならざること、即ちそれは我々が有機體の内へ放つ力の直接體驗でなく、努力の結果身體の周邊に生ずる變化を感覺するに外ならぬと云ふ結論を導き出した。^②この考へはベルグソンの批評するやうに、明かに徹底した意識體驗の空間化的見方を示すものであり、それは努力と云ふ特殊な意識體驗の可能性を同時に認める假定の下でのみ是認され得る見方である。

① Ach, Über den Willensakt u. das Temperament, S. 246.

② Bergson, Essai sur les Données Immédiates de la Conscience, p. 16-17.

努力には種々なる有機的情意的状態が根本動機として働いてゐることは要求體驗の記述の場合に觸れた點であるが、尙妨害された傾向としての努力の本質上、妨害の場合には、不快、怒りを、成功の場合には、妨害なき容易な行動よりもより大きな快感満足を経験させ、又それは同時に様々な身振りの表現を伴ふのである。この行動に伴ふ快不快の感情は意欲力學の作用に基く感情として、アッハによつて「決定された感情」*determinierte Gefühle*と呼ばれてゐる。^①即ち、これらの感情の存在は意欲と感情との間の種々なる力學的關係を現象させるもので、例へば、意欲の實現に伴ふ快感は意志の緊張が大であればあるだけ、又それに對抗する妨害が強ければ強だけ益々大である。或は、失敗の場合の不快、憤怒は意欲の力が大であるだけそれだけ強く、且つこの不快は云はゞ精力の堰き止めをなすことに

より、新しい行動力を刺戟する原因になる。これは力と體驗の相互作用の注目すべき一例である。

① Acl, a. a. O., S. 307.

行動意欲及び行動感情と並んで、行動認識も體驗として現象し得る範圍を有する。無論内省を伴はぬ單純な行動に於ては、認識は意欲と同じく體驗されるよりも寧ろより多く機能するのであるが、一般に行動に於ける目的及び手段の表象の存在はその體驗可能性を證してゐる。固より、單純な本能行動に於て目的表象が常に存在するとは考へられないであらう。然し、それが繰返へされることによつてたとひ不明瞭であるにせよ、何等かの表象が発生し得よう。又目的に至る種々なる手段系列も現在の對象、情況から未來のそれらに至るまで、知覺、記憶、想像等の諸體驗の仕方で見象するであらう。トールマンの云ふ行動認識の諸契機——目的手段に對する期待、識別と操作に對する期待、意識的知識、觀念作用等は單に客觀的行動的に表現されるのみならず、主觀的内面的に體驗され得るのである。否行動は體驗によつて、外は内によつて規定されると共に又その反對が可能である。兩者の間には相互作用が存在するのであり、これ内部體驗を外的空間的のみに規定出來ぬ所以である。例へば、單に切手の色を外面的に區別させることによつて色の感覺體驗を測定し得たと考へる如き誤りがそれである。我々は外的行動的に色を區別し得るのみならず、又ベルグソンの考へるやうに、内面的直接的に様々の色の質的差異を體驗し得る。否色の差別に就ての外的告示は既に色の差別の内的體驗を豫想してゐる。表現は體驗に根ざしてゐること云ふをまたぬ。一般に内省の對象たる内の世界、意識作用と内容が行動の獨自な内面的存在の仕方を作つてゐることを無視するのが行動主義の最も大なる缺點である。斯くの如き行動と力の一方的立場は物心の同形を主張する物理學主義に徹底するは當然で、實踐的態度と

してはアランの所謂「野蠻な暗夜」の行動主義、力のファシズムの源をなすのである。行動主義の立場からは行動の機能の客觀的觀察が主要問題で、行動が意識的か無意識的かは本質的差異でない^①と云はれるかも知れないが、このやうな見方は動物の行動認識には適用されるとしても、人間の行動認識には適用され得ないのである。成程動物的行動に於ては、意識は場の關係を照らすフットライトの機能をもつに過ぎぬとしても、行動の發達と共に意識はもつと重大な意味をもつやうになる。一體意識は躊躇乃至選擇を意味すると云はれるが、この點で、行動が發達し複雑になり、矛盾對立をより多く含むに應じて、意識と知性が決定的役割を演ずるに至るは當然である。が行動認識が意識的且つ自覺的になり、深く廣く鋭くなり、或は混亂した觀念から明晰判然たる觀念へ高められると共に、我々の行動はより内面的價值を増したのであり、自由の體驗をもち得るのである。人間の進歩はかくの如き意味の智慧、光りを求める所に基くのである。それは單に外を照らす光でなくて内を照らす光である。プラトンが洞窟の神話によつて教へてゐるやうに、暗い洞窟を出て太陽の光りを求め、又この光りを他人に傳へるのは哲學者の尊き義務でなければならぬ。「身の燈火は目なり。この故に汝の目正しくば、全身あかるからん。然れど、汝の目惡しくば、全身くらからん。もし汝の内の光、闇ならば、その闇いかばかりぞや」である。

然しながら、思考作用は言葉なくしては行はれない、少く共發達しない。成程トルマンによれば、黒狸々の如き高等動物は明かに觀念し、思考する働きを示すが、然し言語は有しない。故に觀念作用乃至創造的思考作用は言語に先き立つて發生すると結論せねばならぬ^②。然し、思考作用が動物の原始的状態を脱して人間の高い知性にまで發達する爲には、言語の存在が絶対に必要である。故に「人間精神の光りは明晰な言葉である」とホッブスは云つた^③。斯くて又

「皇國は言葉の助くる國、言葉の幸はふ國」として、古代の宗教的・道徳的體驗をそのままに言ひ傳へる言語の神祕力を宣長は禮讚した。事實我々の思考體驗は常に自他との内面的・外面的談話として現象する。思惟は先づ自己と語り、自己に聞く内面的對話である。道徳的反省とは自己と自己の良心との對話である。我々は自己の思想乃至思想の連鎖を言葉或は言葉の連鎖に絶えず翻譯する。これは第一、我々の思想の連鎖を記録し、記憶する爲である。我々は現在及び過去の事物の原因と結果とを知り、これを記録せねばならない。これが技術の獲得の必要條件である。言葉はこの場合記憶の記號として使はれる。第二に、言葉によつて相互に自己の思想、欲求、感情を傳へねばならない。要するに、言語は一般に意味の表現として記憶、傳達、相談、教示、反省等の行動に不可欠な契機である。従つて又、種々なる意識體驗はそれに固有の言語をもつてゐる。例へば、熟考は若しこのことが行はれるならばこんなことが起るだらうと云ふ假定法によつて、欲求と嫌忌とはこれをせよ、これを避けよと云ふ形の命令形によつて體驗されるやうなものである^①。理性の言葉は明晰であるが、愚昧の言葉は混亂し、無意味である。情慾の言葉は野卑であるが、良心の言葉は高貴であらう。斯くて人は言語によつて並外れて賢くなると共に又並外れて愚かになるのである。

① Tolman, op. cit., p. 239.

② Hobbes, Leviathan, p. 22.

目的と手段の表象の全體は生物の行動の世界表象を形成する。固よりそれは理論的・抽象的世界像である筈はなく、行動環境の具體的像である。それ故、環境は行動と同様に科學的・分子的にでなく、前科學的・質量的に、即ち單に個々の視覚、觸覚、聽覺の集合としてでなく、全體的な物、事件として體驗される。次に環境の像は飽迄行動的情意的體驗

を基にしてゐると云ふことが最も注意されねばならぬ。行動的世界像は行動的なることによつて單に表象的でなく、力學的體驗に於て與へられる。力と體驗との相互作用の最も深い意味はこの世界像の形成を中心にして現はれる。このやうな世界像形成の實踐的意味の最も深い現はれの一つは、Aufklärung に對する Bildung によつて示されたヒューマニズムの自己形成の理想であらう。世界により積極的に活動することによつてより深く世界を知るのであり、又その逆である。行動の進化發達はそれから生じて而もそれを越える世界像の擴大、深化によつて規定される。動物は環境の中に没入してゐるが、人間のみは世界を超越的に見ることが出來、従つて又その世界體驗は開放的擴大的であり得るのである。

行動の世界は力學的關係を根柢にした體驗に屬する。世界は單に物の世界でなく、我々の心をそゝるもの、我々の心に働きかけるものである。それは快不快その他様々の感情の陰影を要求し、又我々の行動を様々の仕方でも要求する。斯くの如き情意的體驗を通じて世界はその生命價值、行動價值を露はにする。無論それには知覺が働き、推理が要求されるであらう。然しそのみでは不充分であり、否時には認識は價值體驗に於て情意に出し抜かれる場合も生ずる。シェラーが時間的空間的遠距離感情と稱するものがそれで、不安、恐れ、嘔氣、羞恥、同感、反感の如き生活感情は環境の價值を認識に先き立つて豫料的に現象させる。^①尙情意の外に心がひかれる、壓迫、緊張、しみ込むと云ふやうな言葉で示される意識状態乃至感覺が價值の牽引的反撥的働きかけを現はしてゐる。だが環境をその價值性と現實性に於て直接的自證的に體驗し、生き極めることは行動によらねばならぬ。環境とそこにある對象とは單に期待されるばかりでなく、現實的に體驗されねばならぬ。行動は空虚な場所の中で起るのでなく、それを支持する實體的場

の現實が必要である。この意味で、環境は行動するもの(こと)として Discriminanda と Manipulanda (= things-to-be-discriminated and to-be-manipulated) と云ふ存在の仕方をもつてゐる。前者は行動の感覺支柱で後者は運動支柱である。迷路の鼠は見、嗅ぎ、觸れることによつて識別すべき現實の路を必要とするのみならず、自己の足を押すべき現實の床、その間を操縦して進むべき現實の壁、その中へ飛び込むべき現實の空所を必要とする。一定の形、大きさ、重さ、色を具へた椅子はそれに應じた視覺、觸覺、運動感覺等の識別を可能ならしめると共に種々なる操作の可能性を現はしてゐる。例へば、人間にとつてはこの椅子はその上に坐すべきもの、武器として使はるべきものと云ふ可能性を、鼠にとつてはその中に巢を作るべきもの、その後隠れるべきものと云ふ性格を現はしてゐる。^②斯くの如き行動の連關に於て對象(或は對象のみでなく生物の仲間)を如何に感覺的運動的に識別し、操作するかと云ふ仕方の中に生物の環境内容が明瞭な形を帯びて來る。操作的感覺的識別に基く人間の世界像は所謂 *Homo Faber* の世界觀と見做されてゐるが、然し、それは操作と識別を極めて對象的唯物的に解釋した結果に過ぎぬ。例へば、一國民の國旗が如何に取扱はれ、識別されるかと云ふことは直ちにその國民の名譽の問題であり、又母親にとつてはその子供の肉體は愛情の籠つた操作と誇らしい識別の對象に他ならない。人間とその行動とが肉體と感性と表現とを有する限り、それは Manipulanda と Discriminanda とを支柱とする行動世界に屬してゐる。

① Scheler, *Der Formalismus in der Ethik u. die materiale Werethik*, S. 354-355.

② Tolman, *op. cit.*, pp. 85-89.

我々は又、世界の現實性の意識は力學的體驗を基にし、單なる表象や推理の結果でないことを理解出來る。デイルタ

イが細しく記述してゐるやうに、世界の實在性の意識は意欲、衝動とそれに對する抵抗の力學的關係の體驗に基いてゐる。例へば、今私が或る仕事に従事してゐるとし、そして何か邪魔な音が何か煩はしい考へが發生したとする。私はこの邪魔物を極力追拂つて仕事を続けようと努力するが成功しない。その場合私の努力と並んで一種の心理的壓迫感、不快と妨害の緊めつけられたやうな状態が存在する。それが他者によつて力的に規定される經驗の本質であり、而してこの經驗の中に實在性の意識が發生する。固より行動世界は單に客觀的實在界のみでなく、想像、幻覺の世界をも含み、且つそれらが内的實在的力として行動を規定する。或は又幼兒、未開人の場合のやうに、想像の世界と外の世界とが明かに區別されない場合もある。要するに、生の行動に於て且つそれに對してある世界は又それ自身生の世界であり、生の全體に係る世界である。行動世界は凡そ行動價值と生命價值とを擔ふあらゆるもの、世界であり、物の世界なると共に生物、人の世界であり、實在、假象、言語、思惟、情慾、運命、偶然、時間、空間等のあらゆる存在形式と内容と作用とが行動者の外面的内面的場の力を形作つてゐる。その複雑な世界内容と力學的點に於て事實の世界は小説よりも戯曲よりも遙かに奇である。

① Dilthey, Schriften, V, S. 102.

八

「活動すること、それは生きることである、より多く活動すると云ふこと、それは内面生活の原動力を増すことである。」^①斯くの如き主張の下にギュイヨーは生活と活動と力とを同一物の異なる名稱に過ぎぬと見做した。生物は種々なる力の保存者であり、又その消費者である。生物の行動には營養、同化の自己集中的一面と消費、生産の自己擴大的一

面とがある。前者に於ては、生物は自己の爲に自然諸力を所有し、變化させる。後者に於ては、生物は蓄積された力の過剰を外に向つて擴張し、消費する。性行動乃至知的情意的生産力は何れもこの種の力の擴大である。この力の擴大と消費が即ち人間の文化的道德的生活の發展を成すのである。斯く生きることが活動すること乃至力の發現であり、これらの内的力の擴大消費の中に生活の發展があるとせば、これらの力がどんな風に活動し、又どんな風に相互に働きかけるか、又外的諸力がどんな仕方で内的力と相互に働き合ふかと云ふことを法則的に究明することは非常に重要な問題である。こゝから行動の力學的觀察が要求されるのである。

① Guyau, *Esquisse d'une Morale sans Obligation ni Sanction*, p. 89.

② *Ibid.*, p. 96-101.

行動力學は次の三つの事實の認識をその根本出發點とせねばならない。一、行動の原動力たる意欲は認識、感情等と對して獨自の内的力であり、固有の行動と世界とを生産する力をもつてゐる。二、然し、行動は總じて機械的運動と異なつて有機體の綜合的全體的運動なる故、それには當然有機體の各機能の相互作用が豫想される。知覺行動にも有機體的行動としては情意の作用が強く働いてゐるやうに、意欲行動にも認識、感情との相互作用が認められる。三、行動は内的力の關係、心理的場の方によつて規定されると共に、又外面的場の方によつて規定される。道元の所謂「人の心本より善惡なし。善惡は縁に隨て起る」とあるやうに、如何に高い行爲と雖も外的世界の方によつて強く規定される。而もこの場合にも、内的世界と外的世界とは孤立的に存在するのではなく、等しく行動の世界として相互限定の關係に立つてゐるのである。

意欲は力學的視點から見られる時、一定の目的を實現する力、機能である。行動がその目的に達するか、達しないかは理性や感情よりも先づ根本的にその欲求の力、精力とその強弱に依存する。歴史的社會的行動はその創造的なることに於て又力——内面的力——をもたねばならぬ。英雄崇拜は確かにその意欲の力、精神の力——單に暴力でない——の讚美に基いてゐる。アッハはこのやうな意志の力を決定 Determination と名付け、この決定の強弱が如何に行動力に影響するかを述べてゐる。決定とは意圖、企圖の精神に従つて實現する意欲の影響であつて、この決定の強弱によつて、それによつて規定される行動力に關して種々なる素質の分類が行はれる。即ち慎重な性格や粘液質は決定の力が最も強く、膽汁質、多血質、憂鬱質は弱い。^①個人や民族に於て性格をもつことが誇りとされ、無性格が蔑視される場合の性格とはこの種の一定の目的、原理を把持し、如何なる障害に會しても屈せずとその目的遂行に至らしめる決定の強さを云ふのである。

① Ach, Über den Willen, S. 19-23.

我々は更に意欲の力學に就て分析を加へねばならぬ。六に於てのツールマンによる行動の特性記述に於て明かなやうに、行動は一定の目的對象への到達、或は目的對象からの逃避と云ふ性格を有するが、この現象は力學的には内在的目的の機能として説明される。例へば、迷路に於ての鼠の行動の究極目的は單に食物でなくて、一定の終局的な生理的安靜即ち飢餓を満たすと云ふ状態である。食物、水、異性に到達しようとする鼠は、その根本動力として飢餓を満たす、渴きを満たす、又は性欲を満たすと云ふ一定の生理的安靜に對する要求を内在的決定素としてもつてゐる。或は電氣の衝撃から逃れようとする鼠は、生理的傷害と云ふ一定の生理的妨害から逃れることを究極目的とし、換言

せば、特殊な生理的妨害に反對なる要求を内在的決定素としてゐる。所謂欲求、嫌惡と稱せられるものはこの種の要求に外ならない。然し、これらの終局的生理的目標への、或はそれに反する要求以外に尙様々のより近い、且つ環境的に規定された要求、即ち食物、袋路、通路等の環境的對象への又はそれに反する要求が機能する。この場合には、これらの目的は究極的上位的目的に對する從屬的目的として、即ち手段對象として要求されてゐる。換言せば、飢ゑた鼠は第一次的に飢ゑを満たすことを要求し、この根本要求が機能する限りでのみ第二次的に食物を、飢ゑを満たすことへの道程として、更により二次的に、開いた、目的に至る通路を食物への道程として要求する。^①

① Tolman, op. cit., pp. 27-35.

動物や人間は日常實に無數の刺戟を絶えず外の世界から受けてゐる。而も彼等は總ての刺戟に一樣に反應するのではなく、唯その中から一部の刺戟が選び出されるのである。例へば、絶食した鼠は決して食物に注意しない、否時には食物を前にして眠りをする。チヨコレートに飽満した子供はそれに見向きもしない。食物を注意するのは唯飢ゑた鼠だけである。このやうな刺戟に就ての選擇性は刺戟―反應の分子的行動概念では到底説明され得ないので、それは上位的從屬的諸要求が重要な機能的背景として作用する事實からのみ説明されるのである。我々の内的諸力は孤立的に働くのではなく、レヴィンの所謂心理的場、包括的行動全體性の中に於てそれに規定されつゝ、働くのである。飢ゑと云ふ有機的狀態から發し、それを満たさうとする根本要求、食物への二次的要求等々の因果關聯、力の全體關係によつて個々の行動が規定される。我々の内的世界は單に時間的連續的でなく、空間的非連續的である。即ち機能的固定性と閉鎖性とをもつ種々なる力學的緊張的體系と形態の統一であり、個々の作用と體驗とはこの體系によつて規定さ

れ、又それと共に變化する。このやうな力學的體系は云はゞ精力の貯藏所であり、この要求の力、深さに行動の實現力が依存するのであつて、企圖乃至決心と云ふ特殊な意志體驗の有無又はその強さによるのではない。否、我々は如何に熱心に企圖をなし、強い決心をしても、それが眞の欲求力に基いてゐない爲に實行されない場合を知つてゐる。皮肉に云へば、人は企圖したことは忘れ勝ちである。「善き企圖は自然法則に干渉せんとする無効な試みである。その起りは純然たる自負心で、その結果は絶対に零である」と云ふワイルドの言葉も強ち逆説とのみは云ひ得ない。^①

① Lewin, *Verstanz, Wille u. Beharrnis*, S. 57. レヴィンは企圖作用の力はより深所に存する欲求のエネルギーから見、企圖よりもこのエネルギーの存在を重視する。企圖によつてエネルギーが生ずるのでなく、後者はそれと獨立に存在する。

故に意志の教育は企圖、決心よりもこのエネルギーの涵養を重んずべきであり、それは單に兒童の行動を外面的に訓練、抑壓するのではなく、寧ろ彼等の衝動力を自由に發展せしめつゝ、その力を彼等の克己心に協力させるべきである。カントは道徳的性格は教育、例、教訓が徐々とでなく、本能の動搖状態に對する嫌惡から突如再生として發生せしめる内的革命と考へてゐるが(Kant, *Anthropologie*, S. 238)、確かにエネルギーは突發的に善かれ悪しかれ一種の心變りとして現はれる場合もある。要するにエネルギーは種々なる力學的條件に左右されるので、企圖に基かないと云ふ説は一應認められる。然し、レヴィンの如く企圖の力を全然無視するのも問題である。現にアッハは決定の力は決意の強さにも基くことを述べてゐる。東洋に於ても「眞實の志を發する」と云ふ態度が宗教的・道徳的修業の核心と見做されてゐるのである。

このやうな固定的閉鎖的力學體系の機能によつてのみ人は秩序ある行動をなし得るので、單なる連續的流動的狀態に於ては一定の目的を追求する組織的整合的行動全體の存在は全く不可能である。力學的觀察から云へば、人格構造の發展の重要な特色の一はその力學的體系の分化の程度と固定性に存するのであり、これ幼兒の行動が氣紛れて、環

境によつて支配され易い理由である。これに反して、創造的行動は知識よりも先づ第一に欲求の力が必要である。「世界に於て偉大なるものは強き情慾なくしてはなし得なかつた」とか、「理性は磁石で情慾は風である」と云ふ言葉はこの事實を物語つてゐる。

然しながら、この力學的體系の機能は世界に對する生物の態度をして選擇的ならしめることにより、この世界に對する態度を常に一面的相對的ならしめることを免れることが出來ぬ。或る目的に對する要求はこの要求に關係ある對象刺戟を極めて活潑たらしめるが、同時にそれに關係なき對象刺戟を全く無力にさせる。力學的體系の機能は常に抽象と選擇と一面性とを伴ふ。又力學的體系は體系なることに於て固定的持續的であるが、然しそれは絕對的でなく、要求の満足と共に消失する。即ち體系は常に非體系性を、固定は流動を内在せしめる。故に又行動の論理は秩序と共に無秩序を、整合性と共に矛盾を、客觀性と共に主觀性を本質的に含蓄してゐると云はねばならぬ。行動の世界は一樣的恆常的でなく、情意的強調點とその變動とを有する。行動的に形成され、又行動的に破壊される、そこに現實世界の生命と發展とがある。然し、そこには又行動の論理に必然的な有限性が存在する。だからショーペンハウエルの考へたやうに、世界の客觀的認識の爲には欲求の否定が必要であるとも主張され得よう。心も不安に急ぐ旅人はライン川とその兩岸を單に一本の横線と見、その川の橋をこの線を切る一筋の線と見るに過ぎないであらう。^①或は又バレットによれば、他人の靴を磨くことさへも神聖な平等に反するとして禁止するホテルがアメリカにありながら、この平等を愛する國民は他方で甚しい人種の不平等を行つてゐる。^②これらの一面性と矛盾は明かに、その根柢に力學的體系が排他的に機能してゐることを示してゐる。だが斯く一面性と矛盾とをもつ行動の論理は決して單に主觀的論理ではない。

パレトやリボーの考へるやうに、行動の論理と理性の論理とは抽象的に對立するのではない。行動は客觀的世界に於ての行動として、當然場の諸力との相互的操作を必要とし、斯くて場の關係の洞察、認識は行動の本質的決定素の一方である。又逆に如何なる客觀的世界認識、直觀と雖も行動の有限的力學體系によつて規定されてゐる。だからショーペンハウエルの欲求の否定は生物的生存欲の否定ではあつても、如何なる種類の有限的生活力をも否定すると云ふことは不可能である。藝術的哲學的宗教的行爲は又それぞれの行爲への要求によつて規定され、自己の世界を見得るが他の世界を見ることは出来ない。故に有限の人間存在に可能な無限は單なる無限でなくて、有限の無限である。有限化された無限、無限化された有限、それが絶對行爲及びその論理の本質である。然し、單に有限的行動の論理と雖も、有限的なるが故に直ちに主觀的非合理的ではない。そこには理性活動の種々なる萌芽が見られる。無限に於て有限、有限に於て無限が見られるとなす所以である。

① Schopenhauer, Vom Genie, Sämtliche Werke, II, herausgegeben von F. Grisebach, S. 1144.

② Pareto, Traité de Sociologie Générale, I, p. 656.

(續)